

磯部町は志摩半島のほぼ中央に位置し、東はリアス式海岸の的矢湾を経て太平洋に向かって開いている。的矢湾は東から西に湾入しており、狭い水道部を経て伊雑浦に達している。湾口には渡鹿野島があり、入り組んだ海岸線を一層複雑にしている。

一方、北は伊勢市・鳥羽市に、南は阿児町・浜島町に、西は南勢町にそれぞれ接しており、伊勢志摩国立公園のほぼ中央を占めている。また、紀伊山脈の東端部にあたることから、町の西北部は比較的急峻な山々が続いている。

町域は東西19.98Km、南北16.86Kmで、総面積は78.19Km²である。

平成6年4月22日、志摩スペイン村がオープンし、多くの観光客を集めている。

○磯部町の文学

「私は一人で旅立った。 ・日和山は墓地のある丘であった。霰のふる中で、小さな石塔をのぞいて回ったがわからなかった。

・ ・ 」 ー伊勢の的矢の日和山ー壺井 栄

二十四の瞳で知られる作者が、祖母が子守歌のように何百回、何千回とくりかえしてきた「イセノマトヤノヒヨリヤマ」にある祖父の墓。

祖母が生涯みることのなかった祖父の墓を、的矢の地に捜し求めた時の作品である。

供養塔にお経をあげながら

「 ・ ・勝造じいさん、おばあの代りに、孫とひ孫がまいったぞえ。いせまいりのついででなく、ここへわざわざまいったぞえ ・ ・ 」

胸をうつ場面である。

磯部町のパンフレットの冒頭に、この小説の一節が紹介されている。町もまたこの高名な作家と郷土とのつながりに誇りをもっていることが窺い知れるパンフレットである。

また、この的矢は俳人嶋田青峰の出身地である。高浜虚子との関係から句作をはじめ、句集「海光」を残している。

新興俳句運動とつながっていたということだけで昭和16年検挙、19年に病死している。弟の的甫も俳人。兄弟は故郷をこよなく愛している。俳名青峰はもちろん青峯山、的甫の的は的矢の的である。

日輪は 筏にそそぎ 牡蛎育つ - 青峰 -

海うらら 水平線は 汽船（ふね）を牽く - 的甫 -

いずれも的矢に句碑がある。的矢は俳諧の盛んな地であった。

※ 伊勢志摩の文学 三重・文学を歩く 三重の子ども文学風土記

○郷土資料館

鉄骨造・日本瓦葺・二階建てで平成元年3月の完成。入り母屋の屋根に白壁を擬した外壁のしゃれた建物である。1階が図書館、2階が郷土資料館になっている。

展示は、御田祭、まつり、磯部のあけぼの、磯部の生業、文化財マップなどのコーナーがあり、磯部町の歴史、民俗を知るうえで貴重である。

◎佐美長神社（伊雑宮所管社） 祭神 大歳神（或は伊佐波登美神）

伊勢道路から磯部町に入り、鳥羽への分岐点を右に折れ、橋を渡ると右手に川八のうなぎ屋がある。さらに進んだ右手の丘の上に鎮座する。

大歳社又は穂落社とも呼ばれ、倭姫命が志摩の国を巡幸の際、鳥が昼夜となく鳴き止まないのので、これを見させると、芦原の中に根元は一本で穂が千穂の稲が生えていて、一羽の真名鶴がその穂をくわえて鳴いていた。

そこでこの鶴を大歳神（五穀の神）と崇めてこの地に祀ったと伝えられ今も地主の神として土地の人々の信仰を集めている。

大歳神は五穀豊饒の守護神、伊佐波登美神はこの土地の開拓神である。境内に御前神社が4座ある。小社殿で、御前神とは佐美長神社の御前に

侍り、御心を安める神という。

佐美長神社殿社

正殿	神明造板葺高欄御階付東面	壹宇
瑞垣御門	猿頭門扉付	壹間
瑞垣	袖繰板打	一重
鳥居	神明造	二基

◎同御前社

正殿	神明造板葺南面	四宇
----	---------	----

○天の岩戸

逢坂山の中腹にある石灰岩の洞窟で、天照大御神が隠れ住んだと伝えられ、古くから天の岩戸と呼ばれている。洞窟から涸れることなくこんこんとわき出ている水は神水とされており、雨乞に靈験があるという。日本の名水百選にも選ばれている。

○おうむ石

恵利原和合山山頂にある高さ31m、幅127mの巨大な石英岩で、二つの岩を囲んで語場と聞場の2棟があり、語場の声が離れた聞場の岩で聞こえる。岩の上からは磯部町が展望でき、四季を通じてその眺望は素晴らしい。すぐ近くに国民宿舎伊勢志摩ロッジがある。

◎伊雑宮（皇大神宮別宮） 祭神 天照坐皇大御神御魂

磯部の大神宮さんと呼ばれている。恒例、臨時の祭祀、官幣奉納の儀すべて皇大神宮に準じて行なわれる。

鎮座の起源は、垂仁天皇の御代、皇大神宮鎮座の後、倭姫命には供御の御耕地をこの地に求められたとき、土地の豪族、伊佐波登美命がこれを奉迎し、ここに神宮を営んだのが起源といわれる。

志摩の国第一の宮として尊敬厚く、境内には7～8百年経つと思われる大楠がある。

昔は磯部だけの御師がいて、御田植の御田祭にちなんで、農業の神様として信仰を全国に普及させた。

案内記に「磯部本郷にて泊まるべし。翌日、五智、白木、松尾、岩倉、舟津を過ぎて鳥羽に出る。但し、舟津畑茶屋より舟に乗るもよし、又磯部より青峯（峰）へ廻りて鳥羽へ行くには山田村より登るべし」とある。

毎年6月24日に行なわれる御田植祭は、大阪府の住吉大社、千葉県の香取神社とともに、日本三大御田植祭として有名である。当日は、笛や太鼓にあわせて早乙女が早苗を植え、昔ながらの華やかな行事がくりひろげられる。

また、戦国時代の武将、九鬼嘉隆が、出陣のとき戦勝を祈願し手はじめたという磯部太鼓の奉納がある。

室町時代以降神宮の威力は衰微し、伊雑宮の神領も九鬼氏に押領され、正宮に準じて行なわれてきた式年遷宮も中絶、恒例の祭典に祢宜が参向することも絶えがちになった。

伊雑宮の御師は、旧祢宜家、瀬川文書によれば、遷宮費調達のため社人たちが全国を廻り、初穂料を募ったのがはじまりと伝えている。しかし、伊雑宮の経営は苦しく、社人達は神領を再興するため、鳥羽藩主九鬼、内藤氏からの返還を求めためしばしば上訴に及んだが、殆ど黙殺された。

そこで、伊雑宮を「尊貴な神社である。」と宣伝、神格を高めることにより上訴を有利に導こうとし、「伊雑皇大神宮」と称し、内宮、外宮と並び伊勢三宮説を唱え、中でも伊雑宮こそ天照大神を祭る日本最初の宮で、内宮、外宮は伊雑宮の分家であると主張するようになる。その根拠は「伊雑宮旧記」や「旧事大成経」に示されるが、いずれも新たに作成された偽書である。

明暦(1658)の朝廷の裁決によって、伊雑宮は内宮の別宮で祭神も伊射波富美命と定められ、寛文三年(1663)、主だった社人47人が伊勢志摩両国から追放、天和三年(1683)、「旧事大成経」の破却と関係者の流刑追放が命ぜられ、約50年にわたった騒動に終止符がうたれた。

明治42年(1909)の遷宮から、金銅鋳金物を鐵金物に改められ、造替年期も明治22年(1889)より1年遅らせ、本宮と同年に執行され、今日に至

る。

※ 伊勢志摩を歩く ほか

殿舎

正殿	神明造萱葺高欄御階付鐵金物打立南面	壹宇
瑞垣御門	猿頭門扉付	壹間
瑞垣	袖線板打	壹重
玉垣	角柱指貫	壹重
玉垣御門	猿頭門	壹間
鳥居	神明造	壹基
幄舎	切妻板葺	壹宇
鳥居	神明造	壹基
御倉	切妻板葺	壹宇
忌火屋殿	切妻板葺	壹宇
宿衛舎	切妻柿葺	壹宇
修祓所	切妻板葺	壹宇

○伊雑宮御田植祭

毎年6月24日、宮域の南にあるご料田で行われる伝統的行事である。

地元では「おみた」と呼び、国の無形民俗文化財に指定されている。

志摩地方随一の大祭で、この日は漁師や潜水をひかえた海女たちの参詣も多い。

行事は磯部9ヶ村（下之郷、穴川、迫間、築地、恵利原、上之郷、五知山田、沓掛）により行なわれ、7年に一度の輪番制により奉仕をする。上之郷と五知、山田と沓掛は連合して担当する。

当番区では1ヶ月前から練習にかかり、当日午前11時に伊雑宮に集合、参拝後早苗を先頭にして神田へ向かう。田ならし、早乙女たちによる苗取り、田植と一連の行事が続くが、中でも宝舟を描いた大団扇の奪い合いが圧巻である。また、田舟にのった女装の童児の太鼓打ちなどの囃は興味深い。田植がすむと長い時間をかけて境内まで踊りこみがなされる。

慶長9年(1604)の記録には、「磯部九郷」の名があり、この九郷とは上記の村である。桃山時代の振るい田植の流れを伝えるもので、日本三大田

植祭りの一つとされている。

※ 伊勢志摩を歩く

○青峯山正福寺

青峯山には、磯部口より、又、加茂や五知や松尾より登り口がある。

近鉄松尾駅から、相差方面への道路の途中、青峯山参道という石柱がある。そこから車で約10分で正福寺の山門に着く。標高336mの頂上からの志摩一円の眺望はすばらしい。

真言宗高野山派、天平14年(742)聖武天皇の勅願で行基が開いたといわれる。仁王堂、金堂、庫裡、客殿、聖天堂、大師堂、弁天堂、如意輪堂、鐘楼等の堂宇があり、本尊は黄金仏の十一面観世音菩薩で、相差の鯨山岬近くの海中から引上げられたという。

夜間灯明は航海の道しるべとなっており、船乗り、漁師、海女の祈願所としての信仰が厚い。旧の1月18日の御船祭は非常に賑う。

山門前の大きな常夜灯は、兵庫県西宮の酒の間屋が、江戸へ向かう船の安全を祈り奉納したものである。

山門は、文政13年(1830)に建立、的矢村の大工棟梁、中村九造が歳月をかけて建立したもので、ほどこされた彫刻がすばらしい。

金堂は元禄15年(1702)の建立。重厚で力強い屋根は海の男たちに勇気と心のやすらぎを与える。山門とともに「鳥羽藩に過ぎたるもの」とたたえられた。

○丸興山庫蔵寺

鳥羽市のはずれ、船津から西へ3キロ。山中の石段を登りつめた所、奥河内丸山の頂上近くに丸興山庫蔵寺がある。もと朝熊山金剛証寺の奥の院だったと伝えられるが、現在は真言宗仁和寺派の寺である。

本尊は虚空蔵菩薩のためか虚空蔵寺とも呼ばれる。本堂建物は1561(永禄4年)の唐様建築で内部彩色で飾られている。鎮守堂は1605年の再興で各所の彫刻など桃山様式をあらわす。ともに重文に指定されている。

鳥羽城主九鬼家の祈願所であり、軍艦「日本丸」の「丸」は丸山の丸を取って命名したところから後の船名に「丸」を使用するようになったといわれる。

平成5年2月から46年ぶりに修復工事をを行い、屋根は瓦葺から、本来のこけらぶきになった。落慶法要は11月13日（平成6年）。

※ 三重県の歴史散歩、読売新聞ほか

◎赤崎神社（豊受大神宮末社） 祭神 荒前姫神

近鉄志摩線赤崎駅下車

類聚神祇本源所載長徳俛録及び神楽歌に、志摩国智々利島に在り、とある。神名略記はこれを鳥羽藤之郷とし、志陽略誌は同船倉の南赤崎海岸にあり、としているが、これが現在の社域である。

鳥羽湾内の海岸から海岸から豊受大神宮に奉る御贄海産物採取の守り神である。

現在の鳥羽市鳥羽は、往時伊勢・志摩の国境であり、町内を横断して流れる小流妙慶川をもって両国のわかれるところであった。現在の赤崎神社は、鳥羽の南端にあり地勢上は志摩に属すべき所である。したがって伊勢度会郡内なるべき両宮の摂・末社がここにあるべきいわれはない。

一説に、鳥羽の産土神賀多神社（日和山下）をもって、本社のかつてあった所というものもある。

建久の皇大神宮年中行事六月十五日贄海神事の條に

悪志・赤崎・加布良古明神を祭るとみえている。

赤崎神社は、通称「赤崎さん」と呼ばれ、例祭（6月22日）は「ゆかた祭」として有名である。

○九鬼嘉隆

紀州の武将から身を起こし、鳥羽に水軍を確立した九鬼嘉隆は、元龜2年(1571)に始まった石山本願寺攻防戦に活躍、また伊勢長島の一向一揆に遠征している。

天正5年(1577)には、織田信長の命を受け、大砲3門を装備した鉄板張りの軍艦「日本丸」ほか7隻を率いて参戦し、紀伊雑賀衆、毛利水軍を相手に活躍した。

命名した「日本丸」の”丸”の字は、以後の船の名に使われるようになった。

信長の死後は秀吉に仕え、「朝鮮の役」に参戦、帰国の後には領地3万5千石を有するに至った。そして永禄12年、鳥羽城を築いている。（鳥羽城は大手門が海を向いており、これは日本の城で唯一のものである。）

関ヶ原の戦いでは、嘉隆が西軍（石田方）その子守隆が東軍（徳川方）と、父子相別れて戦い、嘉隆は破れて答志島へ逃れるが、守隆の嘆願による助命の使者が着く前に自決している。その際嘉隆は、

「首は鳥羽城の見える場所に」との遺言を残しており、それに従って現在も答志島の築上山に眠っている。彼の死後、明治時代に海軍ができるまで、わが国に水軍の統帥は現われなかったといい、それほどに九鬼嘉隆は偉大な鳥羽の英雄であったといえよう。 ※ BLUE CITY T O B A

なお、草野唯雄の推理小説「伊勢志摩殺人綺譚」は、この九鬼嘉隆の首と胴にまつわる怨念の物語である。